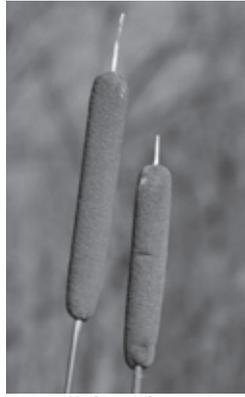


# これであなただは蒲博士

因幡の白兎を救ったのは蒲の穂綿ではない

蒲の穂をほぐした穂綿をまるめて寝具に入れたことから「蒲団」という言葉が生まれたとか、坐禅に用いる蒲の葉で編んだ円い敷物を「蒲団」と言ったとか聞く。また、魚肉を練って竹の串に付け、焼いた竹輪蒲鉾の名は、その形が蒲の穂に似ていることによるものであるとか、茎葉を簾や籠に編んだ等、蒲は昔から、人々になじみの深い植物である。



1 蒲(ガマ)の穂

**因幡の白兎**  
尋常小学唱歌「大黒さま」に、大黒さまの／＼とおり／＼きれいな水に／＼身を洗い／＼蒲の穂綿に／＼くるまれば／＼うさぎはもとの／＼白うさぎという歌詞がある。  
ここには、皮をむかれた白うさぎが、蒲の穂綿にくるまったところが、傷が癒えたことが歌われている。「稲羽之素菟」の話に基づくものである。

では、古事記にはどのようなように出ているのか。次田真幸(古事記(上)全訳注 講談社)を参考に要約すると、「隠岐島の兎が、因幡に渡りたいと思ひ、海に在るワニをだまして、『私とお前を比べて、どちらが同族が多いかを数えてみたい。おまえは同族を全部連れて来て、この島から気多の岬まで、一列に並んで伏しておれ。私がその上を踏んで、走りながら数えて渡り、私の同族とどちらが多いかを知ることしよう。』といった。そして、数えながら渡つてきて、今まさに地上に降りようとするとき、『お前は私にだまされたんだよ。』と言ひ終るやいなや、一番端に伏していたワニが兎を捕らえて、着物をすっきり剥ぎ取つてしまつた。泣き悲しんでいるところへ、大勢の神々が通りかかり『潮水を浴びて、風にあたつて、高い山の頂に寝ておれ』と教えられたので、そのとおりにしたら、兎の体の皮膚がひび割れてしまひ、痛み苦しんでいるところへ、神々の最後尾に付いてきた大穴牟遲神が、『今すぐこの河口に行つて、真水でお前の体を洗つて、ただちにその河口の蒲の花粉を取つてまき散らし、その上に寝転がれば、お前の体はもとの膚のようにきつと直るだ



2 指先に付けた蒲黄(蒲の花粉)

らう。』といわれた。その教えのとおりにしたところ、兎の体は元どおりになつた。』という内容である。稲羽之素菟の「蒲」の箇所を、同書によって書き下し文で読むと、「今急(すみや)かにこの水門(みなと)に往き、水をもちて汝が身を洗ふ即ち、その水門の蒲黄を取り、敷き散らしてその上に寝転(こいまる)べば、汝が身本(もと)の膚のごと必ず差(い)えむ」となっている。

蒲の穂と穂綿と蒲黄  
すなわち、古事記では、「穂綿」

本多 郁夫

ではなく「蒲黄」となっている。漢方では「蒲の花粉」を蒲黄(ほこう)と呼び、止血剤、鎮痛剤として用いられ、また、切り傷や軽いやけどには患部に直接塗布するとも言われている。植物好きのある人にこのことを話したら、「蒲の穂綿が傷を治したと思つていた。皮をむかれた白兎が、蒲の穂の細かい種子(じつは果実)を体にくつつけると、いかにも毛が生えたという姿になり、傷が回復したと言つたのだらうと理解していた。」と返つてきた。蒲の穂綿を赤裸の皮膚に付けたら潮水を浴びたのに劣らずチクチクしてひどいことになるであらう。このような誤解ま



3 綿毛を付けた蒲の穂綿(果実)

で生み出してしまった。罪な歌である。そのため、古事記に当たらない

で因幡の白兔を書いた民話や童話や記事の多くに蒲黄と穂綿の混同が見られる。また、正しく蒲黄と書いてあっても、図1のような蒲の穂が描かれていたりする。念のため言うが、図1の状態の蒲の穂には、蒲黄は断じて残っていないのである。

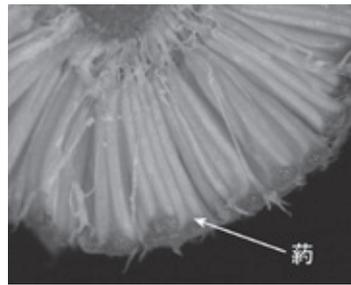
作詞者が、蒲黄のことをなぜ、穂綿と言ひ換えたのか、あるいは、穂綿のことだと誤解していたのかは分からない。蒲の花粉は、6〜7月頃の雄花から出る黄色い粉状のもので、図2がそれを指に付けたところであり、感触は天花粉のようにサラサラしている。これは、短い花の時期でなければ見ることができないので、特に注意していないと花粉の存在には気づかず、いつの間にか花が終わって、蒲の穂、すなわち蒲の果実の集団が発達してきてはじめて蒲があったと気付くのが普通である。蒲の穂ならば、夏から翌春まで、見ることのできる期間も長く目立つので、人にもよく知られたものであるから、誤解していた可能性が考えられる。

いずれにしても大黒さまの作詞者が蒲黄を穂綿に置き換えたため、「蒲の穂綿が傷を治した」という誤解につながり、自然解説などで「歌にもあるように蒲の穂綿が白兔の傷を治した」とやニュース番組で「傷付いた兎が蒲の穂に触れて直った」という因幡の白兔の民話、秋になるとその蒲の穂が見頃を迎えます。」という解説をしてしまうことになる。



5 花の時期は目立たない

は、雄花が中軸の周りにぎっしりと並んだ集団が上であり、下には雌花の集団がやはり中軸の周りにぎっしりと並んだ2段階構成になっている。雄花は花粉を出し終えると枯れてしまい、雌花だけが果実となり、果実



4 中軸の周りにほとんど葯だけからなる雄花がぎっしりと並んでいる

もう少し詳しく解説してみよう。蒲の花は、通常目にする花とは異なり、花弁も萼片もなく、雄花は図4のようにほとんど葯(花粉、すなわち蒲黄を入れる袋)だけからできていて、虫眼鏡で見なければ分からないような小さなものである。蒲の花



8 綿菓子状態



7 かなりほぐれてきた



6 蒲の穂がほぐれはじめた

の集団が茶色く太いフラクフルトの蒲の穂に変身する。

蒲の穂では図3に示した綿毛が傘をすばめたようになってぎゅうぎゅうに集まり、しかも綿毛の傘が常に開こうとしている。蒲の穂は風や振動などの物理的的刺激が加わって、どこか一箇所でも崩れると連鎖的に破壊が進み、それぞれの果実は綿毛をパラシュートのように開いて綿菓子のような状態になる。この綿毛を付けた果実が穂綿であり、風に舞い上がり、新天地を目指すのである。

**果実と種子**

図3の穂綿を蒲の種子とかいてある本や記事が非常に多いが、これも正確ではない。果実とするのが正しい。それは、穂綿の綿毛でない箇所(果実の本体)を破ると中から種子が出てくるので穂綿が種子ではなく果実であることが分かるのである。このような果実は、種子の外に果肉がなく、痩せていることから、学問的には瘦果(そうか)と呼ばれる。タンポポの種子と思われるものも、同じく瘦果である。

ところで、1個の蒲の穂にはどれくらいの穂綿が付いているのだろうか。十万個と数えた本もあれば三十五万個と聞いたこともある。この差は大きすぎる。どうやって数えたら良いのだろうか、私は未だ実践してはいないが、蒲博士を目指す読者には、ぜひ挑戦して頂きたいところである。